

武定侯郭勛と通俗白話歴史小説

ここでは、明代後期の武官の文学活動に焦点を当てる。世宗嘉靖帝に寵愛されて時めいた武定侯郭勛は、武臣でありながら、『三國志演義』・『水滸傳』という通俗小説を私刻（家刻）したことで知られる。この事例は、明代の「武官と文学」の問題を考察する格好の題材であろう。郭勛が両小説を私刻した背景には、一体どのような意図があったのだろうか。

一、郭勛の刻書活動の素地

郭勛（一四七五？ - 一五四二）。字世臣、号東泉・蒼巖）は、明朝開国の功臣郭英の六世孫で、五代目武定侯を襲爵した武臣である。世宗嘉靖帝の寵愛を受け、軍事権を掌握し、政治的にも内閣大学士らと同等の発言力を持つほどになる。嘉靖二十年（一五四一）に数々の不法行為と不軌の罪に問われ、翌年獄中で死した。

郭勛の文学活動については、夙に戴不凡・胡吉勛による論考があるが、郭勛の生平の考証に用いる史料が『明史』卷一三〇「郭英傳」

の郭勛伝にとどまること、文学活動の背景にある人脈やコミュニティには目が向けられていないこと、また『三國志演義』の刊行意図については全く言及されていないことなどの問題がある。

そこで筆者は、『明史』に加えて、『明實錄』や『新中國出土墓誌』北京卷（北京文物出版社、一九九四年）などの歴史資料、『毓慶勳懿集』八卷（正徳十年序。武定侯家所蔵の郭氏墓誌・祭文、勅・誥券、詩文等を収める。管見は東洋文庫蔵台湾国立故宮博物院蔵本景照）や『奏進郭勳案狀』（嘉靖二十年郭勳の獄に関わる奏上と詔諭を録す。明刻本。管見は『天一閣藏明代政書珍本叢刊』第二十一冊（北京綫裝書局景印本、二〇一〇年）といった郭氏にまつわる書籍、明人の詩集・文集などを広く閲覧し、郭勛の生平と文学活動について、資料の整理を行った。詳しくは井口論考を参照いただきたいが、郭勛は平生、武官に属する公侯家に身を置きつつ、上は皇帝や皇宮内外の内官・文官から、下は平民（賦役・徭役を負う民戸・軍戸や、免役身分の生員など）、さらには無籍の徒（アウトロー）まで、あらゆる社会的コミュニティ（ここでは職位と戸籍によ

井口 千雪

る分類を指す」と広く交流を持っていたことが分かった。しかも郭勛の刻書活動は、伝統詩文から実用書、通俗小説まで幅広く、文学を通じて、白沙学派の重鎮である湛若水のような一流士大夫とも交誼を結んでいた。郭勛は、通俗小説たる『三國志演義』・『水滸傳』を私刻する際、いったいどこを受容層として想定したのであるか。以下、『三國志演義』と『水滸傳』刊行の背景について考察を加える。

二、郭勛と『三國志演義』

ここでは、郭勛による『三國志演義』私刻の意図について、三つの視点から考察を試みる。

第一に、郭勛は刻書活動において、人民教化の効果を期していた。現存する唯一の郭勛自筆の文章である「重刊千金寶要序」（正徳十一年序。台北故宫博物院に所蔵される医書『千金寶要』（清末楊守敬による鈔本）の冒頭に置かれる）には、その刊行目的が以下のよう

に述解されている。

人人得以自療、曠復命脉、以永其天年、若然則醫天下之事功、雖不敢仰企其萬一、而於國家仁育黎元之意、未必無肉忽之助。

誰もが自分で治療でき、命を長らえさせ、天寿を全うすることができ、そうであれば、天下を治療するという功績については、その一万分の一も望めないかもしれないが、国家の人民を教育する意においては、少しばかりの助力となろう。

一方の『三國志演義』については、郭勛自身が刊行意図を述べた文

献は存在しないとみられて来たが、筆者は拙著にて、所謂「嘉靖壬午序本」（上海図書館等蔵）と称される版本の冒頭に附された関中（関西）修髯子「三國志通俗演義引」が、実は郭勛によって書かれたものではないかと推定した。この仮定が正しければ、『三國志演義』私刻の意図は修髯子序に述べられる以下の部分ということになる。

不待研精覃思、知正統必當扶、竊位必當誅。忠孝節義必當師、姦貧諛佞必當去。是是非非、了然於心目之下、裨益風教、廣且大焉。

詳しく調べたり深く考えるまでもなく、正統は必ず扶くべきで、位を盗めば必ず誅せられるべきであるとわからせるのだ。忠義・孝節は必ず手本として学ぶべきで、奸貪・諛佞は必ずとりのぞくべきであると分らせるのだ。善と悪は、心の目の下にはつきりとし、人民の教化に役立つこと多大である。

『三國志演義』の刊刻にも、やはり「風教」（人民の教化）というキーワードが現れているのである。

第二に、郭勛は三國志物語に登場する人物にシンパシーを持っていた。現段階で資料からうかがえるのは、諸葛孔明と関羽に対する思い入れである。郭勛は正徳年間に鎮守両広総兵官として広西梧州に駐在していた頃、南方の反乱を鎮圧するなどの功績をあげた。この武略が諸葛孔明の南征を連想させたようで、顔文芳（詳細不明）の詩に「偉望已聞超葛亮、殊功應喜邁汾陽」（優れた評判はすでに遠くまで聞こえて諸葛亮を超え、優れた功勳は喜ばしく唐の名将郭子儀を超える／『毓慶勲懿集』巻四「詩」と詠まれたりしている。郭勛自身も、孔明に自身を投影していたことだろう。また関羽を神

として崇拜し、観音と関羽の図像を十萬軸あまり描いて都内外の民に配っていたことが、『奏進郭勛案狀』「刑部等衙門謹題」に記録されている。

第三に、『三國志演義』の刊行により、世宗嘉靖帝の即位を擁護する意図があつた可能性を指摘する。世宗が傍系でありながら帝位に就いたことにより、嘉靖元年〜三年に所謂「大礼の議」（世宗の伯父である孝宗弘治帝を「皇考」と号するか、世宗の生父である故興献王朱祐杭を「皇考」と号するかという議論）が巻き起こり、朝廷内が分裂することとなつた。郭勛はこの時世宗側に附いている（『明史』卷一三〇「郭英傳」（郭勛伝））。このような状況下で、傍系中の傍系である劉備が漢王室の正統な継承者として全国を統一する物語を描く『三國志演義』を刊刻すれば、世宗の即位を支持することになる。

三、郭勛と『水滸傳』

次に、『水滸傳』私刻の意図について、郭勛の言動と『水滸傳』の共通点を三点挙げながら考察する。

第一に、『水滸傳』には「好漢」同士の絆（忠義）が重点的に描かれているが、郭勛の行動にも相通ずる所が認められる。まず、『水滸傳』に登場する頭領格の人物と同様に、郭勛は自宅に多数の無頼漢を匿っていた（以下の引用は『奏進郭勛案狀』「刑部等衙門謹題」）。

不合招集四方亡命并無頼惡棍。
不法にも四方の亡命者や無頼漢を招集している。

とりわけ小旋風柴進は、無頼漢を邸に匿っていることだけでなく、名門貴族の末裔である点、治外法権を承認されている点など、郭勛との共通点が多く認められる。郭勛は『水滸傳』を刊行する際、柴進に自身を投影したのではあるまいか。

また『水滸傳』には、罪を犯した好漢が好漢が救う描写があるが、郭勛も嘉靖八年（一五二九）、罪を犯して辺境に流刑となつた武官（錦衣衛人）を救い出し、都に還すという事件を起こしている。郭勛は『水滸傳』に影響を受けたか、或いは自身の行為を擁護するために『水滸傳』を刊行したのではないか。

第二に、郭勛の言葉と『水滸傳』には、武官が軽んぜられる社会への批判的精神が表出している点で共通性が認められる。『水滸傳』が武人の立場に立脚した価値観を持っていることは、小松謙氏によつて指摘されている通りである（例えば元生員で梁山泊に落草した王倫の人物描写など）。一方の郭勛は、嘉靖十九年（一五四〇）四月、收賄の罪で禁錮となつていた涼州副総兵陳を擁護した際の奏上で、武臣の立場から文官を批判している（以下の引用は『明實録』「世宗」卷二二六「嘉靖十九年四月」癸未）。

將臣雖以善戰爲勇、亦以相機爲智、而文臣不諳軍旅、但驅之使戰、或待以荷禮、或繩以文法、至於誣死。

將臣（武臣）は戦いにすぐれることを「勇」としますが、臨機応変であることも「智」とします。しかし文臣は軍事に暗く、ただ武臣を駆り立て戦わせるばかりで、ある者はくどくましい札式を以て対し、ある者は「状況を顧みず？」成文法を以て糾弾し、誣告して「武臣を」死に追いやることまであります。

郭勛は、忠義を存するにも関わらず文官に虐げられる武官・武人の現実を描く『水滸傳』に同調したのではあるまいか。

第三に、郭勛と『水滸傳』はともに、世宗が厚く庇護した道教一派、正一教との関わりが認められる。『水滸傳』の冒頭は、北宋仁宗の御代、天下に疫病が生じ、勅命を受けた洪太尉（洪信）が、江西龍虎山上清宮の張天師を訪ねる一幕から始まる。洪太尉が伏魔殿の封印を破り、三十六の天罡星と七十二の地煞星が天下に解き放たれ、百八人の豪傑に生まれ変わるのである。

正一教は、後漢の張道陵に始まり、第三代天師張魯が漢中で「五斗米道」と称して布教し（『三國志演義』にも登場）、東晋の時に第四代天師張盛南が江西龍虎山へ拠点を移し、全国へ勢力を広げた。世宗嘉靖帝は、第四十八代天師張諺頤を厚遇しただけでなく、龍虎山上清宮の道士邵元節を崇拝し、その死後には弟子の陶仲文を篤信したことで知られている。郭勛も、自宅に匿っていた道士段朝用が錬成した仙銀の食器を世宗に献上した際、仲介を世宗の寵士陶仲文に依頼している（沈徳符『萬曆野獲編』卷二十七「釋道、段朝用」）。郭勛が『水滸傳』を刊行すれば、正一教そのものの称揚になる上、世宗に向かって、自身がそのグループに属することをアピールすることにもなる。

小結

自身も戦争と隣り合わせであった郭勛は、兵士達や無頼漢を主とする社会的下級層の現実を熟知しており、そのような社会に批判的

精神を持つていたが故に、武官・武人の価値観が主張された作品である『三國志演義』・『水滸傳』を私刻したのである。しかも、皇帝・一流士大夫とも交流を持つ郭勛は、彼らに両小説を配り、現実社会の問題を知らしめ、彼らの意識を改革させようという意図も持っていたのではないかと疑われる。

皇帝・士大夫と平民・アウトローを繋ぐ社会階層にあった郭勛のような人間が、自身の主張の仮託として書物の出版という方法を獲得したことは、異なる社会階層の文化的・精神的融合を促し、「大衆文学」の成り立ちの歯車の中心となつたのではあるまいか。

《注》

- (一) 明嘉靖期・晁璉の家蔵書目録『晁氏寶文堂書目』中巻「類書」に、『水滸傳』武定板」と『三國通俗演義』武定板」が著録されている。
- (二) 戴不凡「疑施耐庵即郭勛」據一九七五年秋在學習小組會上的發言整理（戴不凡『小説見聞録』、九〇～一二九頁、浙江人民出版社、一九八〇年）。胡吉勛「郭勛刊書考論—家族史演繹刊佈與明中葉政治的互動」（『中華文史論叢』二〇一五年第一期（總第一一七期）、三六七～三八九頁、二〇一五年三月）。
- (三) 井口千雪『三國志演義成立史の研究』（汲古書院、二〇一六年）序章の本文及び注二三。同上「明朝勲戚武定侯郭氏と文学—家譜・年譜—」（『京都府立大学学術報告・人文』第六十八号、九三～一五二頁、二〇一六年十二月）。同上「明朝勲戚武定侯郭氏と文学—諸葛の如き—定襄伯郭登—」（『中国文学論集』第四十六号、一一一～一三三頁、九州大学中国文学会、二〇一七年十二月）。同上「武定侯郭勛の人脈—その文学活動を支えたもの（前編）」（『中国文学論集』第四十七号、三七～六九頁、九州大学中国文学会、二〇一八年十二月）同上「武定侯郭

- 勳の人脈―その文学活動を支えたもの（後編）」（『和漢語文研究』第十
五号、二〇一〇二三四頁、京都府立大学国中文学会、二〇一八年十一
月）。
- （四）井口『三國志演義成立史の研究』序章参照。
- （五）小松謙『中国歴史小説研究』（汲古書院、二〇〇一年）第七章「詞話
系小説考―『殘唐五代史演義傳を糸口に―』五。
- （六）莊宏誼『明代道教正一派』（台湾学生書局、一九八六年）に詳しい。